

上野尼御前御返事

御書新版 1913年3行目〜7行目
御書全集 1580頁 6行目〜9行目

(烏竜遺竜の事)

法華経と申すは、手に取ればその手やが
て仏に成り、口に唱うればその口即ち仏な
り。譬えば、天月の東の山の端に出ずれば、
その時即ち水に影の浮かぶごとく、音と
ひびきとの同時なるがごとし。故に、経に
云わく「もし法を聞くことあらば、一りと
して成仏せざることをなけん」云々。文の心
は、この経を持つ人は、百人は百人ながら、
千人は千人ながら、一人もかけず仏に成る
と申す文なり。

通解

法華経というのは、手に取れば、その手
が直ちに仏に成り、口に唱えれば、その口
がそのまま仏である。

譬えば、天の月が東の山の端に出れば、
その時、直ちに月の影が水に浮かぶように、
また、音と響きが同時であるようなもので
ある。

ゆえに、法華経に「もし法を聞くことが
あれば、一人として成仏しない者はいない」
と説かれている。

文の心は、この経を持つ人は、百人は百
人全て、千人は千人全て、一人も欠けるこ
となく仏に成るといふ文である。

語句

「もし法を聞くこと……」

法華経方便品第2の文（法華経138頁）。法
華経を信受する者は、一人として成仏しない
ことはないとの意。